

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780534

研究課題名(和文) 小学校入門期におけるひらがな教育理論の検討

研究課題名(英文) A Study of a Hiragana Education Theory in the Elementary School Introductory Period

## 研究代表者

長岡 由記 (Nagaoka, Yuki)

滋賀大学・教育学部・講師

研究者番号：90615915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校入門期におけるひらがな教育理論を構築するための指針を明らかにするものである。本研究では、系統的な文字指導に関する文献を調査し、「系統性」について文字提出順の観点から整理した。また、幼稚園年長児の「書字」法と「書字」方略を調査し、文字習得の諸相について明らかにした。その結果を踏まえて、書字法と書字方略を記述する評価法を提示した。最後に、ひらがな教育における幼小接続をめぐる問題を取りあげた上で、学習者の自発的な外界への働きかけとその受容の仕方という観点から、入門期のひらがな教育理論構築のための指針を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to clarify the guidelines for building a hiragana education theory in the elementary school introductory period. First, I showed the procedural rule of character submission by investigating a document of systematical character guidance. Next, I investigated kindergarteners' writing methods and strategies and clarified the various aspects of character acquisition. Based on the result, I presented the evaluation method to describe a writing method and strategy. Then I took up a problem concerning the connection of hiragana education in infancy and childhood, and clarified the guidelines to create hiragana education theory in the elementary school introductory period according to the methods that the learner who asks for assistance to others in order to read and write kana characters.

研究分野：国語教育 文字教育

キーワード：ひらがな教育 小学校入門期

### 1. 研究開始当初の背景

小学校入門期におけるひらがな教育は、「語形法」による文字指導と、教育科学学会国語部会の「音声法」を取り入れた文字指導という二つの指導法の影響を受けながら行われてきたと考えられる。例えば、柴田義松(1967)は、小学校入門期に活用する教材とその指導原理について明治初期から昭和43年まで検討を行い、戦後のひらがな教育については、明星学園国語部『にっぽんご』シリーズ(昭和39年~43年)を取り上げて論じている。また、教育調査研究所(1977)による「小学校国語「入門期に関する研究」」では、文字指導に関連する文献の一覧や指導法の推移が示されているが、戦後は「語形法」と『もじのほん』の「音声法」が紹介されている。

しかし、「語形法」による文字指導は、「文字」ではなく「語」を基準にした指導であり、文字の習得ができないという批判からしだいに衰退していったため、「語形法」の教育理論がそのまま現在の文字教育に受け継がれているわけではない(長岡, 2010「かな文字教育論の課題」)。さらに、「音声法」についても、1960年代以降の小学校国語教科書教材には、教育科学学会国語部会の提案した「音節記号」が導入されていること(長岡, 2010「小学校入門期におけるかな文字教育観についての一考察」)から何らかの影響を受けていることは推察できるが、文字教育観(文字観、文字習得観、文字指導観)の観点から分析した結果、必ずしも教科研式「音声法」に基づいているわけではないことが明らかとなった(長岡, 2009「かな文字教育の理論的検討」)。

つまり、入門期におけるひらがな教育は、現在明確な理論的基盤をもっているとは言えない状況にある。そのため、入門期においては何らかの「系統的な指導」が行われるという見通しはあるものの、その内実については明らかではない。また、就学前の文字習得と入門期の学習とのつながりも不明瞭なままである。したがって、幼小の接続を念頭に置きながら、就学前の文字習得の実態を踏まえた上で入門期のひらがな教育理論を構築する必要がある。

### 2. 研究の目的

以上の課題意識に基づき、本研究では、小学校入門期のひらがな教育における「系統性」について検討を行うとともに、就学前から続く文字習得の諸相について明らかにするために「書字」法と「書字」方略を調査する。その結果を踏まえて、ひらがな教育における評価法の検討を行う。最後に、文字教育における幼小接続をめぐる問題を取りあげ、学習者の自発的な外界への働きかけと受容

の仕方という観点から、入門期のひらがな教育理論構築のための指針を明らかにする。

### 3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では(1)小学校入門期のひらがな指導における「系統性」の観点の整理(2)ひらがな「書字」法と「書字」方略の調査(3)方略の記述を含めた評価法の提案(4)幼小接続の問題の整理とひらがな教育理論構築の指針の提示、の4点を中心に行った。各項目の研究方法は、以下の通りである。

(1)ひらがな指導における一定の順序・法則が提示されている文献を取りあげて、「系統性」の観点を整理し、記述する。

(2)幼児の作文における語の綴り方の特徴(「書字」法)と表記法が分からない(もしくは確信できない)場合の外界への働きかけと受容の仕方(「書字」方略)を調査する。

[調査対象]H県私立幼稚園に通う年長児39名(男児19名、女児20名)(第4回調査は38名(男児18名、女児20名))

[調査期間]2013年9月~2014年3月

第1回:2013年9月18日

第2回:2013年10月30日

第3回:2014年1月10日

第4回:2014年3月11日

[手続き]

観察者はクラスに入り、教育活動の全体の流れ及び書字活動の自然観察を行う。第1回目は、年少・年中・年長の各組における文字指導の様子を観察し、指導の際に用いられているワークの内容や文字指導の仕方の実態把握を行う。第2回目は、「運動会の思い出」作文を見ながら、指導者及び園長先生との情報交換及び年長児の授業観察を行う。なお、作文は、10月25日に書かれたものである。第3回目は「冬休みの思い出」、第4回目は「一年間の思い出」というテーマで作文活動を行う。

[調査内容]

作文用紙(12マス×16行)に各テーマに関する思い出を書く活動を設定する。指導者及び観察者は、誤字、脱字、仮名の誤り等は指摘しない。子どもが挙手をして求めた要求に従って助言及び支援を行う。作文用紙に書かれた語の綴り方及び作文過程における幼児の行動および他者からの援助内容とその受容の仕方について調査する。

(3)加藤泰彦,コンスタンス・カミイ(1997)の構成論による文字教育および塚田泰彦(2008)の「創発つづり」研究における評価法を検討し、子どもが意味を表現するためにどのような方略を用いているのかを評価する方法を提案する。

(4)幼小接続の問題を検討し、学習者の外界への働きかけと受容の仕方観点からひらがな教育理論構築のための指針を示す。

#### 4. 研究成果

(1) 小学校入門期のひらがな指導における「系統性」の整理

『幼稚園教育要領解説』の「4 言葉の獲得に関する領域「言葉」の「内容の取扱い」」には、「一人一人の幼児の文字に対する興味や関心、出会いを基盤にして、小学校以降において文字に関する系統的な指導が適切に行われることを保護者や小学校関係者にも理解されるようさらに働きかけていくことが大切である。」(p.134)と記されている。「保護者」だけでなく「小学校関係者にも」とあるように、幼児教育で担う文字教育の重点的内容を明示するとともに、小学校以降で系統的な指導が行われることを明確化し、小学校関係者にも理解を求めるものとなっている。

平仮名学習の系統性が論じられる場合に多くみられるのが、文字の提出順を一定の法則のもとに行うという提案である。この提出順について大熊(2009)は、「五十音図の文字提出法にならい、母音 清音 濁音 長音 拗音...の順に、多くの子供に定着していると思われる生活に密着した文字から、字形に注意し、書きやすいものからなどが考えられるが、現在は、の方法が一般的である」(p.211)と指摘している。

3つの観点のいずれも学習者にとって習得が容易であると考えられる文字から提出するという法則になっている。ただし、は多くの学習者に定着していると思われる文字から提出するというものであるため、学習者の状況に応じて指導者がある程度提出順を柔軟に変えられる幅をもったものとなっている。音と文字との関係 書きやすさについては、さらに細かい指摘があるので、それぞれ取り上げて整理する。

##### 音と文字との関係

「音と文字との関係」に基づいた系統性は、教育科学研究会の「音声法」による文字指導において具体的に提案されている。

直短音は、「(1) 音節のつくり方 (2) 音節の発音のしやすさ (3) 音節の頻度数」[須田(1967), p.40]を考慮し、「アカ[夕]サナ[マ]ハ[ワ]ヤワ」の行の順に配列されている。「音声法」は、語を構成している音を分解、抽出した後に、その音に文字を対応させていくため、「発音のしやすさ」という点も加味されている。また、未習の文字は「・」などの音節(もしくは拍)に対応した記号を用いて提示し、学習対象文字を明確に示しながら、一字ずつ順序立てて指導が行われる。

この「音声法」における系統性は、「音節のつくりの単純なものから複雑なものへ」という観点から設定されており、清音の直短音・撥音・濁音・促音・長音・拗音・拗長音という配列が提示されている。

##### 書きやすさ

「書きやすさ」に基づいた系統性は、主に「画数」と「字形」に着目したものである。野口(2005)は「平仮名」の字形、筆順

に気をつけて、上手な文字表記ができる」(p.11)ことを学習目標に据え、「平仮名指導系統図」を提示している。指導においては「平仮名指導系統図」にしたがって、難易度の優しい文字から習得させるように時数を配当すること」と「表記の似ている文字や間違えやすい文字はできるだけ、同じ時間内に指導するようにして、異同をはっきり意識させるようにすること」(p.11)が求められている。同様に、内田文子の論考でも「画数」や「書きやすさ」を観点とした系統性が提案されている[内田文子(1992)p.58]。

下記の表1は、以上の「系統性」の観点を整理したものである。

表1 「系統性」の観点

音と文字との関係	単純	→	複雑
	清音の直短音		撥音・濁音・促音・長音・拗音・拗長音
音節のつくり	アカ[夕]サナ[マ]ハ[ワ]ヤワ		
発音頻度	易	→	難
	高	→	低
画数書きやすさ	少	→	多
	易	→	難
定着度	高	→	低

入門期の平仮名学習において「系統的な指導」という場合には、「音と文字との関係」が単純なものから複雑なものへという大枠の流れがあり、さらに直短音は「音節のつくり」や「発音のしやすさ」、「頻度」、「画数」や「書きやすさ」という観点によって学習文字が選定されていることが見てきた。さらに、学習者の生活に密着している定着度の高い文字から提出するという観点もみられた。これらの観点は、どれか一つだけが用いられるというわけではなく、音節のつくりを基準として書きやすい文字や字形が類似した文字から指導を行う等、組み合わせられて用いられる場合もある。いずれも学習者にとって容易だと考えられる文字から提出し、音と文字との関係に気づくことや、字形などに気をつけながら読み書きできるようにするための「系統的な指導法」が考案されている。

しかし、このように予め指導者が選定した文字(表記)を順序立てて取り上げる「系統的な指導」は、学習者による難易度の違いを指導に反映させにくく、また短期間で全ての学習者に一律に指導を行うという点において課題がある。また、この系統性には、読み書きの学習活動においてみられる他者との関わりの中での学びについては考慮されていない。学習者の外部に「系統性」を見出すのではなく、個々の学習者がどのように文字を読み書きしようとしているのか、また文字をどのように認識しているのかといった

読み書きの活動そのものから学びの体系化をめざしていく必要があると考える。

## (2) ひらがな「書字」法と「書字」方略の調査

では、実際に学習者はどのように文字を読み書きするのか。この点について明らかにするために、本研究では幼稚園年長児を対象とし、慣習的な文字や表記法に習熟していない段階で、どのように自分の思いを書きあらわそうとするのか(=「書字」法)、書き方が分からないときに外界にどのように働きかけ、またそれをどのように受容するのか(=「書字」方略)について調査を行った。なお、「書字」は、一字ずつ書くことと、語を構成している文字を書くことを指す用語として用いている。

### 「書字」法

幼児が作文を書く過程では、外言を伴いながら一字ずつ書きあらわしていく姿がしばしば観察された。この姿から、書きたい内容を音声上で想起した後に、その音連続を文字連続で書きあらわそうとしていることが分かる。音声コードから文字コードへの変換が自動化されていない段階では、様々な表記の仕方がみられる。今回の事例では、以下の～の特徴がみられた。

### ・音(文字)の脱落

語を構成する音(文字)の脱落は、直短音、撥音、促音、長音、拗音すべてにおいて出現した。

### ・音(文字)の挿入

語を構成している音(文字)以外の音(文字)を挿入する事例も、拗音以外において見られた。

### ・他の音(文字)への置換

直短音を書きあらわす場合に、「他の音(文字)への置換」がみられた。

・発音の仕方に起因すると思われるもの【事例】いのほり[も] たもしかった[の]

・類似形態文字との混同

【事例】がんばりました[り] りわい[れ]

・助詞表記との混同

【事例】をやこ[お]

また、撥音節及び促音節を書きあらわす場合には、同じく1音節2拍である長音節に置換する場合があることが明らかとなった。

【事例】しんかーせん、ずうと、もらあた

さらに、長音を表記する際には、オ列長音表記において異なる仮名遣いが生じている(例：うんどおかい)。これはア～エ列の原則である各列の仮名にその列の母音を添えて書くという原則をオ列長音にも適用した結果として捉えることができる。つまり、母音を添えるという法則性への気づきはあるが、それをオ列長音にも適用している段階であることが分かる。

拗音の表記では、大文字化させたり、小文字化させたりする現象が確認できた。

### ・誤配置

直短音のみからなる語及び撥音、拗音を含む語において「誤配置」がみられなかったのは、直短音および撥音、拗音は単独で発音が可能であることから、語の順序性を分析するときに音声上で確認可能であることが影響していると考えられる。

### ・その他

上記の～以外にも、語を綴るときに、ひらがなだけでなくカタカナ表記を併用するという特徴がみられた(例：ゆキガっせん、ぷれぜんと)。さらに、全てカタカナ表記をするという事例もみられた(例：バザー、タノシカッタ)。

作文を書く過程では、音声ルートを文字ルートに変換する際に起こる現象だけでなく、字形の認知や運筆に関わる非慣習的な文字が出現していた。特に、書字過程でみられる字形の誤りについて、大庭(2003)は「原型保存」「異配置」「崩壊」「異字」(p.531)の4タイプを指摘しているが、本調査でもこの4つが認められた(表2)。

表2 4つの型の書字事例

型	事例
原型保存	ね(ね) お(お) ま(ま)
異配置	う(う) く(く) き(き)
崩壊	ま(ま) は(は) る(る)
異字	れ(れ) ベ(ベ) ツ(ツ)

調査において最も多く出現していたのが「原型保存」である。学習者によって特定の文字や同様の構成要素を持つ文字において「脱落」もしくは「付加」「変容」させている場合があった。

### 「書字」方略

次に、書き方が分からないときに幼児は外界にどのように働きかけ、またそれをどのように受容するのかを調査した。

表3 「書字」における外界への働きかけと受容の仕方

働きかけ	受容の仕方
(1) 他者に尋ねる。	教わった通りに書く(筆順、字形とも同じ)。
	同じ字形を再現するが、筆順は異なる。
	類似した形態の文字を書く。

	教えてもらった字とは異なる字を書く。
(2) 身の回りから対象文字(表記)を探す。	探し出した対象文字(表記)を見ながら、書きあわす。
(3) 自分が書いた文字列を他者に読んでもらう。	自分の書いた文字連続を音声化されたものを(指で押さえたりなぞったりしながら)聞き、モニタリングする。

調査の結果から、学習者は書き方が分からないという状況下で様々な働きかけをしていることが明らかとなった。そして、その受容の仕方も一様ではなく、自分のニーズに応じて必要な情報を抽出し、自分の知識や技能に組み込んでいることがみえてきた。さらに、幼児は対象文字そのものを尋ねるわけではないことも明らかとなった。調査において、濁音や半濁音の場合には清音の書字法を尋ねる場面が多くみられた。幼児は、自分が既に知っていることについては尋ねようとはせず、分からない(確信が持てない)文字構成の一部のみを尋ね、そこで得られた知識と既知の知識とを組み合わせて書字を行っているのである。

文字習得は個人差が大きいことが認識されているが、その個人差を「書字」にかかわる諸能力だけでなく、一人一人の学習者が他者とどのように関わろうとし、またそれをどのように受容することによって書くという行為を遂行しているのかという視点からも捉える必要があると考える。外界への働きかけを含めて「習得」を捉え、それらをもとにひらがな教育理論を構築していくことが重要である。

### (3) 方略の記述を含めた評価法の提案

次に、ピアジェの構成論による文字教育[加藤他,1997]や「創発つづり」研究[塚田,2008]の成果を取り上げながら、方略の記述を含めて一人一人の習得状況に応じた支援を可能にする評価法について検討を行った。

その結果、学習者の方略を記述し、学習者が日本語の書字[読字]の概念を構築していく過程を長期的に記録する方法が重要であることを見出した。このような評価法の一つとしてイメージトリテラシー(emergent literacy)において活用されている“Word Creation Strategies Record Sheet”(Judith A. Schickedanz, 1989, p.102)を取りあげ、学習者が使用した方略、初期の音韻的つづり(創発つづり)、過渡期の音韻的つづりなどを記録する方法を提示した。

上記の方法のように、学習者の表現を音韻意識の発達も見据えながら、どのような方略

を用いているのかを軸として記録していくという評価法を構築していく必要があることを指摘した。

### (4) 幼小接続の問題の整理とひらがな教育理論構築の指針の提示

最後に、幼小接続の問題を整理し、ひらがな教育理論はどのように構築すべきかを検討した。

文字教育の文脈において幼児教育と学校教育の接続が話題になった場合に多く見られるのが、幼児期に身に付けた書き癖を修正することが非常に難しいという入門期の指導上の困難さである[大庭,1996]。一方、幼児教育では、読み書きの技能ではなく遊びを中心とする活動の中で興味関心を育て、文字で表現したり伝え合ったりする必要性や動機を育てていくことが重視されている。つまり、一方では知識・技能の習得という視点から接続を見据えており、他方では興味関心や動機という心情面から接続を見据えているため、それぞれが重視している内容を尊重し合うことや互いの学習内容に理解を求めることにとどまりやすく、建設的な議論になりにくいのである。

現在、この問題の打開策として有効だと考えられているのが、指導者が活動の場における子どもの具体的な姿を記録して持ち寄り、協議することで接続のあり方を模索するという手法である[お茶の水女子大学附属幼稚園他,2008]。文字教育の接続を考える上でも、読み書きの活動の場で生じる学びの姿を捉え、それを踏まえながら教育理論を構築していくことは重要である。

これまで、読字書字技能の習得をめざしたひらがな指導法は多く提案されているが、学習者自らが外界へ働きかけてそれを受容することによって文字の学びを育てているという側面については十分に検討されてはいない。本研究で明らかにしたように、他者と関わりながら読み書きしようとする方略も含めて「習得」を捉える必要がある。そして、他者とのかかわりの中でみえてくる子どもの内面の育ちや知識技能とむすびつく気付きを、具体的な姿から把握するための枠組みとして機能するひらがな教育理論を構築する必要がある。

### (5) 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、文字の読み書きの技能や文字認識だけでなく、学習者自らが外界へ働きかけ、それをどのように受容することによって文字を読み書きしているのかという姿を含めて個々の「習得」を捉えることを提案し、この「習得」観に基づいてひらがな教育理論を構築することの重要性を指摘した点にある。他者との関わりを通して学びを実現

させる方法を開拓することによって、規範的な文字(表記)を教授することに偏りがちな入門期のひらがな教育のあり方を再構築することが可能となる。また、この「習得」観に基づいた場合には環境における学びを重視する幼児教育とのつながりも明らかになることが期待できる。

ただし、活動においてどのような学びが生まれているのかを把握するためには、文字教育における学びをどのような視点から捉えるのかという枠組みを構築することが必要である。今後は、さらに読み書きの場における学習者の外界への働きかけとその受容の仕方を調査、検討し、具体的な教育理論構築へと結びつけていきたい。

#### 引用文献

内田文字(1992)「一年生から落ちこぼしを生む文字指導」『教育』42(10)、pp.54-60

大熊徹(2009)「入門期指導」『国語教育指導用語辞典 第四版』教育出版、pp.210-211

大庭重治(1996)「通常の学級に在籍する書字学習困難児の指導上の問題とその改善に関する調査研究」『特殊教育学特殊教育研究』33(4)、日本特殊教育学会、15-24

大庭重治(2003)「就学前後の平仮名書字における誤字の発生とその変化」『上越教育大学研究紀要』22、pp.529-537

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校/子ども発達教育研究センター(2008)『「接続期」をつくる - 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働』東洋館出版社

加藤泰彦, コンスタンス・カミイ(編)(1997)『ピアジェの構成論による幼児の読み書き』チャイルド本社

教育調査研究所編(1977)「小学校国語「入門期」に関する研究: 語彙の実態と文献研究」『研究紀要』第13号, 教育調査研究所

柴田義松(1967)『現代の教授学』明治図書  
須田清(1967)『かな文字の教え方』むぎ書房

塚田泰彦(2008)『リテラシー学習の再構築のための創発的綴りの体系的研究』(日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書, 平成18年度・19年度)

野口芳宏監修/大谷和明・「鍛える国語教育」研究会空知ゼミ著(2005)『確かな国語学力(基礎・基本)を育てるマスターカード平仮名・片仮名ワーク』明治図書

Judith A. Schickedanz.(1989). The Place of Specific Skills in Preschool and Kindergarten. , *Emerging Literacy: Young Children Learn to Read and Write*, Intl Reading Assn

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

長岡 由記, 幼稚園年長児の「書字」方略の検討 - 外界への働きかけとその受容の仕方に着目して -, 国語科教育、査読有、第76集、2014、31 - 38

長岡 由記, ひらがな「書字」教育における評価法の検討、国語科教育、査読有、第74集、2013、38 - 45

[学会発表](計2件)

長岡 由記, 幼稚園年長児のひらがな書字法の検討、第126回全国大学国語教育学会、2014年5月18日、於: 愛知県産業労働センター

長岡 由記, 小学校入門期における系統的な文字指導に関する一考察、第125回全国大学国語教育学会、2013年10月27日、於: 広島大学

[図書](計3件)

山元隆春編著、長岡 由記 他、協同出版、教師教育講座第12巻中等国語教育、2014、285-303

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

長岡 由記 (NAGAOKA, Yuki)

滋賀大学・教育学部・講師

研究者番号: 90615915

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし